地図と写真で見る柿の木坂今昔物語

私は柿の木坂に生を受けてからのち、一歩もこの地を離れたことがない。ここで商売をしている者ならともかく普通に会社勤めをしていた者としては転勤というチャンスもなく面白くない人生でした。しかし、私の父も祖父も皆、この地で農業や事業をして一歩も離れたことがなく、小さかった私によくこの辺の昔話をしてくれた。私が小さい頃の我が家は茅葺屋根で裏には大きな納屋があり、上蔵には汚れて欲しくないもの、下蔵には主に外で使う脱穀機や唐箕（とうみ）などの農機具がしまってあった。納屋の後ろには屋敷守りと言って欅の木が二本聳えていたが、そこには神の蛇がいると脅されていた。

唐箕

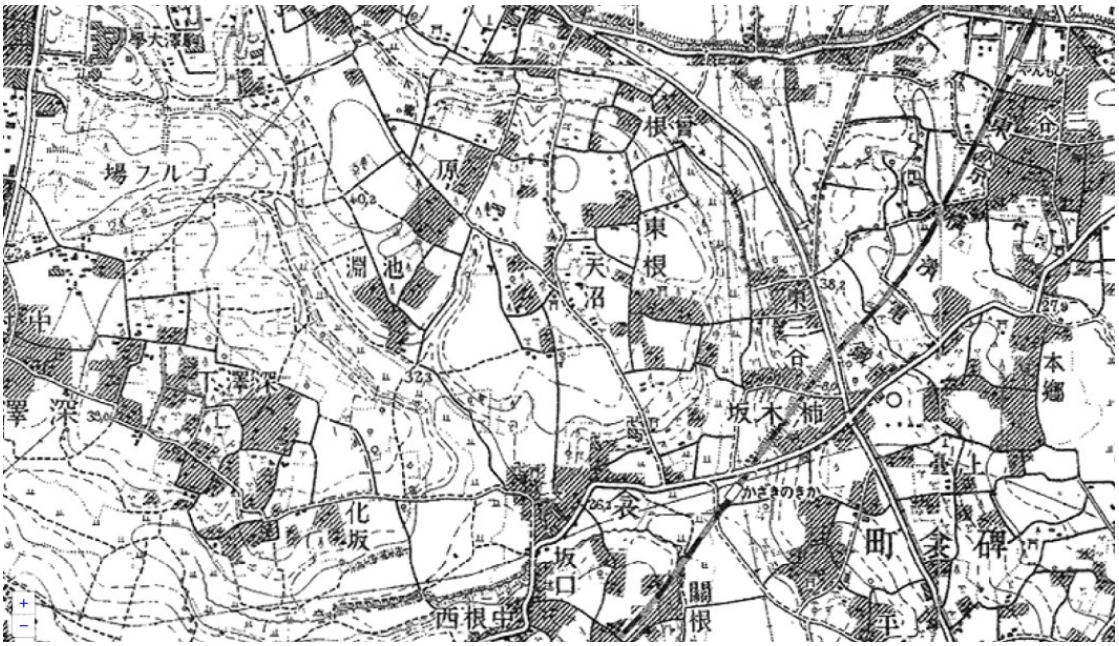
祖父の時代、呑川の周りはまだ田んぼになっていて稲を作っていたが田んぼの脇はすぐに坂になってしまうのでそこでは水田の代わりの畑で陸稲や野菜を作っていたそうだ。

当時の我が家の北側写真、
左の建物は離れの風呂場

私が小さい頃、我が家には水道はなく井戸の水を櫓の上のタンクに汲み上げてそこから台所や風呂まで配管を引いていた。だから水を使っているうちにタンクが空になってしまうと急いで井戸に行きポンプを手で押して汲み上げるのが私の仕事だった。下水はというと下水管などは通っていなかったのでいわゆる自然浸透だった。従って下水を流して自然浸透させる場所は家を挟んで井戸の反対側に作ってあった。（汚水は・・・）食べ物の生ゴミは家の裏の畑に穴を掘って埋めそれ以外の

燃えるゴミは危なくない場所で燃やして灰にしていた。今の生活感覚では大変非衛生的な暮らしであったが、ある意味自己完結型の循環型社会である。近所の古い家にはどこにも柿の木があった。我が家にも太郎柿、次郎柿、富有柿など何種類かの柿の木があり秋、実が食べごろになると先の方に割れ目をつけた竹竿（はさご）を枝の部分に器用にはさんで柿もぎをして食べた。

下の地図は私が生まれる前、昭和６年発行の地図だが現都立大学駅は柿ノ木坂という駅名だった。また今は駒沢公園になっている所はその当時はゴルフ場、今の地名は昔とは随分と違っている。私の家は東三谷との境にあって、家の前の道を上ったところにある東横線をまたぐ橋の名前は東三谷橋と呼ばれ、今もその名は残っている。

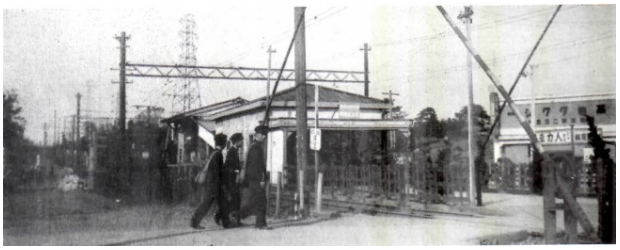


この地図では柿の木坂支流だけでなく駒沢支流や呑川本流も田の（旧）地図記号で表されている。

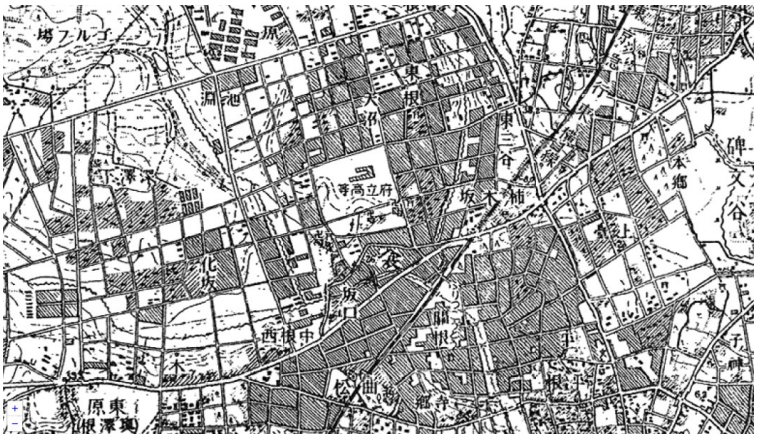
また、この地図からは昭和２年に開通した東横線は（旧）目黒通りの下を通っていたことがわかる。

右の写真は昭和５年頃でその当時東横線の駅名は柿の木坂だった。柿ノ木坂駅の後方に（旧）目黒通りが写っている。

この（旧）目黒通りの写真左手側は勾配がきつく柿の木坂の由来になったという説もある。その後、昭和６年府立高等学校が麹町から現在地に移転することに合わせ柿ノ木坂という駅名は府立高等前駅に、またその翌年には「前」がなくなり府立高等駅と変わっていった。



こちらは同じ場所の昭和22年発行の地図で、東横線の駅名が府立高等に変わっている。また、この地図では呑川は川として記され道路も昭和６年から始められた耕地整理に



よりほぼ現在の形に整備され、柿ノ木坂一帯は都市化が進んだ。もっとも耕地整理と言っても大半の農家は自分の土地を供出しなけれ

ばならず話がまとまらない場合も結構あったらしい。

この航空写真は当時の地図を作成した時のもので、所々にまだ畑が残っている

下の航空写真は府立高等駅と一部が完成している目黒通りを写したものだ。

これらの写真や地図を良く見ると、府立高等駅の近くに新しい道

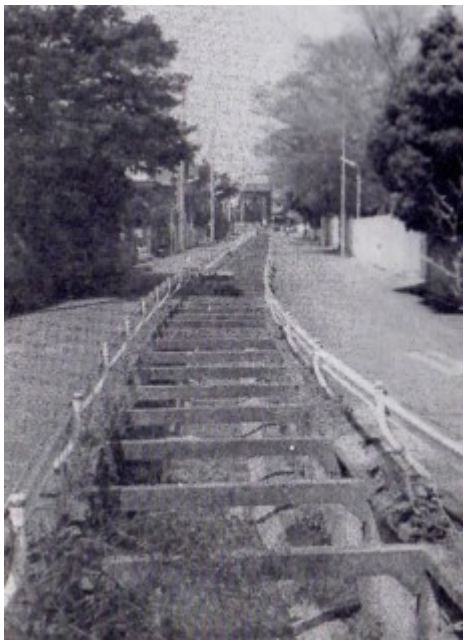
（今の目黒通り）を作っていることが分かる。

しかし、この新しい道は昭和30年ごろまでは一部を都南共栄百貨街として利用し食料品や日用雑貨などのお店の他に小学生の私が大好きだった都立模型店や中華料理のおいしい三友軒などが入っており地元の人々に喜ばれた商店街だった。

左の写真は上の地図で赤い矢印方向に撮影したもので目黒通りと東横線の立体交差がはっきりと写っている。

その頃の呑川の土手は自然のままで子供たちは川まで下りて行ってザリガニ取りをしたり笹舟を流したり、平たい石を探しては水切りをして遊んでいた。その後、護岸工事が始まり子供たちは川に下りて遊ぶことが出来なくなった。

しかし、子供の知恵は呑川での新しい遊びを考えた。その遊びとは護岸工事で川に下りられなくなったが擁壁の両脇を支えているコンクリートの柱（右の写真はガードレールで囲まれているが初期の頃はガードレールが無い）を平均台にみたててその上を渡って遊んだ。勿論、途中でバランスを崩し川に落ちる子もいた。



（私もその一人だった）

呑川は時々暴れることがあり、周囲を呑み込むということから呑川という名前がついたという説がある。昭和33年の狩野川台風の時は柿の木坂近辺でも洪水が発生し呑川の近隣住宅では床上まで浸水

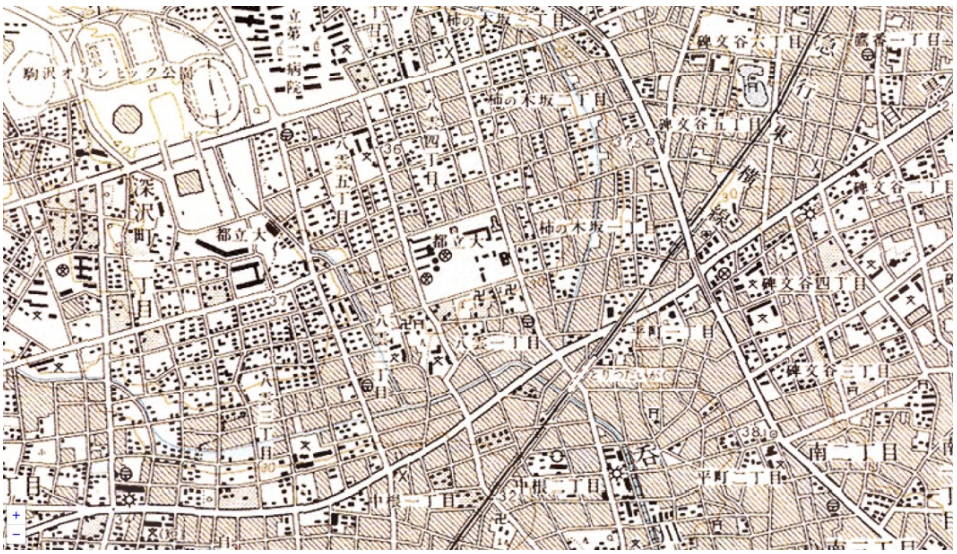
した。一方、駅名にもなった府立高等学校は昭和24年の学制改革により都立大学付属高校と都立大学に変わり駅名も都立大学に変わった。しかし、私の祖母たちは暫くの間新しい駅名を使うことなく買い物に行く時は「ふりつ」に行くと言って都立大学駅前のマーケット（先程の都南共栄街）に出かけていったものだ。

この都南共栄街は正式には「海外引揚者都南共栄会」というらしい。終戦後、海外から次々と帰ってくる人達が何か仕事ができるようにと作ったのがこのマーケットだと聞いている。昭和22年に完成し地域の人々の買い物で賑わっていたこのマーケットは所詮目黒通りの予定地の上に建ったものであったため、昭和39年開催される東京オリンピックに合わせて取り壊しとなった。そして目黒通りの工事が再開され（旧）目黒通りは高さを削り取って真直ぐな広い道にし、今の柿の木坂交差点からのなだらかな坂道になった。一方で目黒通りの下を走っていた東横線は柿の木坂を過ぎたあたりから高架となり都立大学駅も地上駅から今の高架駅になった。

昭和38年撮影の航空写真に当時の工事風景が見られる。

この写真でははっきりと判らないが当時の呑川はまだ開渠のままである。しかし呑川流域の宅地化が進むとともに川は生活排水による水質悪化が激しくなり暗渠化工事が昭和40年代に始まった。

この地図は昭和42年の地図であるが、目黒通りは完成している。



また、この地図では住居表示が新しくなっていることが判る。

この新住居表示によって柿の木坂は１丁目から３丁目に変更された。また八雲という新しい町名ができ衾町を中心として宮前町、中根町、大原町、芳窪町の一部の地域が八雲１丁目から５丁目町となった。

昭和40年代に始まった呑川の暗渠化工事は大凡10年後の昭和50年初頭に完成し、今は川の上は緑道となって地域住民の散歩道や30年前と同様、子供たちの遊び場にもなった。日頃、地域の人々は忘れてしまっているかもしれないが緑道の下は呑川が今日も流れている。しかしこの川は過去何度も氾濫したこと、また最近では平成30年８月呑川本流の流域で29棟の床上浸水３棟の床下浸水が発生したことを忘れてはならない。

この柿の木坂今昔物語を終わるに当たり、住居表示から消えてしまった地名などには昔の人が意味のある名前をつけていた場合があること、そして新しさや便利さの背景には先人達の苦労があったことを稚拙な本稿からご理解いただければ筆者の願うところです。

参考文献；めぐろの100年
呑川物語
国土地理院25000分の１地図